

令和 2 年 6 月 19 日現在

機関番号：32664

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2019

課題番号：17K02443

研究課題名(和文)交友圏を視座にした上田秋成文学の総合的研究

研究課題名(英文)The general reserch on UEDA Akinari's literature from the viewpoint of his range of the friends

研究代表者

長島 弘明(NAGASHIMA, Hiroaki)

二松學舎大學・文学部・教授

研究者番号：00138182

交付決定額(研究期間全体):(直接経費) 3,300,000円

研究成果の概要(和文): 上田秋成の文学的な業績を、交友圏を視座としながら、再検討した。その結果、次のような成果を得た。

- (1) 晩年の傑作『春雨物語』に関して、秋成が出版する意向があったかどうか、従來說が分かっていたが、本屋からの出版打診があったということが書かれている書簡をあらたに見出し、秋成にその意向がないわけではなかったことを明らかにした。
- (2) 秋成の最晩年の自選句集『俳諧嘘を月夜』を新たに見出し、秋成の晩年の独自の俳風は、彼が若い頃、大阪の俳人たちから影響を受けた都会風の俳風とは異なり、また、彼が40代の頃、蕪村から影響を受けた俳風とも異なっていることを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

秋成は『春雨物語』を何度も書き換えているが、その事実をもとに、本文が固定することを避けたいために秋成はこの作品の出版を拒んだ、と考えているかのような論もあった。そして、出版された『雨月物語』との相違を強調する論調も、少なくなかった。『春雨物語』の出版の可能性を示唆する書簡の出現で、それらの論は今後、再考を余儀なくされると思われる。

秋成晩年の自選句集としては、従来『俳調義論』が知られていたが、これは転写本であり、誤写もまま見られた。新出句を多く含む自筆本の『俳諧嘘を月夜』の出現によって、今後安心して、秋成の俳諧の全貌を見渡すことが可能になった。

研究成果の概要(英文): I reviewed the literary achievements of Ueda Akinari from the perspective of the circle of friends. As a result, the following conclusions were obtained.

(1) There was a controversial theory as to whether or not there was an intention of Akinari to publish the "Harusame Monogatari" in his later years. I found a letter stating that there was a publication consultation from a publisher. So it was possible that Akinari would publish "Harusame Monogatari".

(2) I have found a new haiku collection "Haikai Uso wo Tsukiyo", which was chosen by Akinari himself in his last years. Akinari's unique haiku in his later years, is different from the urban haiku inspired by haiku poets in Osaka when he was young. It is also different from the haiku style that was influenced by Buson when he was in his 40s.

研究分野：日本近世文学

キーワード：上田秋成 『春雨物語』 『俳諧嘘を月夜』

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

従来の秋成研究においては、伝記研究と作品研究が乖離したまま進められてきており、せっかく伝記研究において得られた新しい知見が、作品解釈や作品評価に結びつかないまま放置されてきた。

例えば、秋成の俳諧作品の研究の場合、私自身、秋成の生涯の俳諧活動を何期かに区切って、各時期に俳壇のどういう流派と交渉があったかという論文を書いたことがある(「秋成の俳歴」)。俳人としての秋成に、伝記上の新知見を加えることはできたが、各時期の秋成の俳諧作品の傾向など、俳諧の中身の考察に関しては、この伝記的な新知見は生かされていない。

そこで今後は、伝記研究と作品研究の一体化を意識的にはかることで、秋成の俳風の理解を進めたいと考えた。具体的に言えば、秋成の若い時期の俳風は、その時期、秋成が交流した大阪の都市風各派の俳人たちを調べ、それらの俳人からの複合的な影響をうけたものとして、明確化できるのではないかという予測のもとに、伝記調査と作品内容の検討を平行して進めることとした。

2. 研究の目的

伝記研究と作品研究の融合で、明らかにしたい課題は次の通りである。

浮世草子『諸道聞耳世間狙』『世間妾形気』、読本『雨月物語』、通例の読本とは違った読本『春雨物語』など、小説の作風の転変の理由とその意義を、大阪文化壇の師友・出版書肆との関係から明らかにする。特に、それまで秋成が書き、出版した他の作品と違って、この時点における秋成の物語観に基づいて最初から出版する意図がなかったのではないかという論を立てる研究者もいる『春雨物語』については、その論の妥当性をも、この方向から検証したい。

また、俳諧については、新資料の発掘に心掛けながら、秋成の俳歴を3期に分け、大阪の都市俳諧諸派と親しい青年期、蕪村一派と親しい壮年期、俳壇から距離を置いた老年期の各作品を具体的に取り上げ、特定の俳人との交友が句にどういう影響を与えているか明らかにする。

さらに、多くの画家と交流を持ち、画賛を多く残している秋成であるが、呉春、河村文鳳、山口素綱、渡辺南岳、墨江武禅、十時梅屋らとの関係を詳細に追求し、秋成の和歌・俳諧における絵画の意味を明らかにすることも副次的な目的とした。

3. 研究の方法

まず、俳諧・小説・和歌等の秋成の文学活動の各ジャンルについて、まずジャンル別に、そのジャンルに属する主要作品の成立や、その作品の特質に大きな影響を与えた、秋成の交友圏内にある人物を、秋成関係の諸資料から洗い出した(その洗い出しの折には、200通を超える秋成の書簡が大きな手がかりとなった)。それらの人物の業績とその特徴を、各地に所蔵される資料を調査しつつ明らかにし、秋成作品との詳細な比較検討を行い、秋成文学の形成過程の一端を明らかにした。

4. 研究成果

(1) 『春雨物語』に言及する書簡の紹介と考察

文化五年六月二十二日執筆と推定される、京都の知人(松本柳斎あたりが有力か)宛の秋成新出書簡を紹介し、そこに、「物がたり十番」として『春雨物語』に言及する部分があり、しかも「書林も上木したきと申物もあり。いまだ一決なければ」と記している。すなわち、出版書肆(吉田四郎右衛門あたりが考えられる)から刊行を打診され、それを考えている最中であるとする。この手紙の宛先の人物にそれを相談したいとも言っている。

他に、伊勢の人物(伊勢松坂の素封家長谷川氏と推定)から『春雨物語』の書写本を依頼されたこと、その依頼に従ってある大阪の知人(斎収法師と推定)に書写を頼んだこと、しかし、そのできあがった書写本があまり気に染まないこと、自分で書写しようかとも考えていること、あるいは依頼人が満足するような能筆家がいればそれに清書させてもらいたいことなどが、手紙中には記されている。秋成の『春雨物語』が、どのような交友圏の中で、書写され、流布し、また出版に載せられようとしているか、きわめて具体的にわかる資料である。

従来、『春雨物語』の書写に関してはほとんどわかっておらず、また秋成の『春雨物語』刊行の意図の有無については、まったく不明であった。この手紙が、それらに関する初めての資料である。ここから秋成が、それほど親しくはない人物(または面識のない人物)の注文に応じて、おそらくは対価を得るために『春雨物語』を書写していること、ゆえに、残存する何種類もの『春雨物語』の原稿は、彫心鏤骨の推敲ばかりとはいえず、一種の作業として書いている場合があること、作品の刊行をまだ決めかねていて相談したいということは、秋成の物語観云々の問題ではなく、決めかねている理由として、例えば出版にかかわる費用などの、もっと即物的な原因の方が考えられること、等々が明らかになったのである。

これは、『春雨物語』諸原稿が書かれた動機と、また秋成晩年の物語観について、従来まったく考えられていなかった新たな仮説を提示することを可能とするものであり、秋成文学の研究の進捗に資するところの多い成果である。

(2) 晩年の自筆自選句集『俳諧嘘を月夜』の紹介と考察

秋成晩年の自選句集としては『俳調義論』が知られていたが、これは自筆本ではなく転写本で

あるので、所々に誤写による、意味不明の箇所がある。この『俳調義論』よりも多くの句を収録し（秋成の句だけで109句）かつ自筆本である『俳諧嘘を月夜』は、新出句も多数含み、この句集の発見によって、初めて秋成の俳諧の全業績が安心して見通せるようになった。『俳諧嘘を月夜』は、秋成の75歳、76歳ころにまとめられたものであるが、収録される句は、青年時・壮年時の句は少なく、9割前後が秋成69歳以後の句で占められている。この事実は、伝記的調査に基づけば、50代の後半から俳壇との交わりを断っているものの、秋成の俳諧創作意欲自体は衰えることなく、それ以後も続いているということを如実に示している。しかも俳壇と長らく関係断切しているだけに、刊行される俳書に収録することを予期して、俳壇的な評価に合うような句を作る必要がなく、晩年になるにつれて俳風も独自のものになってゆく。

秋成は、若い頃は、田舎俳諧系の諸派とは関係が薄く、もっぱら大阪の都市俳諧系の俳人諸派と密接な関係を持っている。都市俳諧系の俳人が刊行した俳書には、広い範囲にわたって秋成の句が見える。そのころの秋成の俳風は、彼ら都市俳諧系の俳人の影響をまともに受けた、機知に富んだ人事句中心の、雑俳に近い俳風である。

それが、40代から50代前半にかけては、蕪村・几董の夜半亭一門と交流を深め、俳風は浪漫的、物語的な、いわゆる蕪村調に傾いていく。

秋成の50歳の時に蕪村が、56歳の時に几董が亡くなってからは、秋成はすっかり俳壇と疎遠になり、独自の「ただごと俳諧」とでも呼ぶべき俳風を色濃くしてゆくのである。その行きついた先が『俳諧嘘を月夜』であり、従来紹介されていた『俳調義論』にこの『俳諧嘘を月夜』が加わることによって、晩年の秋成の俳諧理念がくっきりと浮かび上がってくるのである。

と同時に、若い頃からの秋成の俳風の変遷と、それぞれの時期の秋成の俳風形成に影響を与えた俳人たちとの交友、俳壇と距離を置いた後の独特の俳諧観なども、この『俳諧嘘を月夜』の中から見えてくる。その意味で、この書の紹介は、晩年のみならず、秋成俳諧の全期に及ぶ特質の把握に有益である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 3件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 長島弘明	4. 巻 第14号
2. 論文標題 芳賀矢一『留学日記 東京大学国文学研究室蔵本の影印と翻刻』	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 東京大学国文学論集	6. 最初と最後の頁 107～169
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 長島弘明	4. 巻 94巻11号
2. 論文標題 春雨物語の書写と出版	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 国語と国文学	6. 最初と最後の頁 86～100
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 長島弘明	4. 巻 13号
2. 論文標題 渋谷和邦氏蔵上田秋成資料	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 東京大学国文学論集	6. 最初と最後の頁 99～113
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 1件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 長島弘明
2. 発表標題 宣長と秋成
3. 学会等名 第35回鈴屋学会大会（招待講演）
4. 発表年 2018年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 長島弘明	4. 発行年 2018年
2. 出版社 岩波書店	5. 総ページ数 258
3. 書名 雨月物語	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----